勘違いで魔王さん

ヘンゼル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
勘違いで魔王さん

【Ｎコード】
Ｎ９６４４Ｕ

【作者名】
ヘンゼル

【あらすじ】
ある日穴に落とされて俺は死んだ。
と、思ったら生きていた…そう異世界というファンタジーな世界で。
とりあえずは生きている意味がない元いた世界のことは忘れて、こっちで楽しく過ごそうという、そんなお話。

プロローグ

現状報告をさせてもらいたい。

助けて！助けて

！助けて！

いきなりこんな感じですまない。
とりあえず、現状を整理させてもらいたい。

場所：風呂場　格好：全裸　時間：午後七時前　状況：穴に落ちそう

最後のがおかしいのは、分かってる。
しかしそれ以外には言いようがないのだ。
なぜなら、風呂から出て体を乾かして服を着ようとしたら、穴に落ちそうになったのだ。

しかも、床下はないし、土もないし、穴の底は見えない程暗くて遠く、とても怖い。
今のところは、近場のものを掴んでいるから、落ちることはない。
兎に角、いったん落ち着こうぜ、俺。

一応男性として生まれてきたんだ、筋力はそこそこあるはずだ。
突然のことだったのでびっくりしたが、冷静になればこれぐらい何とでもなる…はずだ。
足をじたばたとしながら、何とか脱出することが出来た。
俺が、穴から脱出を成功させると、穴はたちどころに狭まり消えてなくなった。

正直言って気味が悪い…。
一気に汗が引く感覚があった。

「はぁ、怖かった。人生最大のスリルを味わった気分だ……」

一度、周囲を確認しほかに異常がないか確認しておく。
うん、周りには異常はないな。
でも、やっぱり感覚だけで実際は起こってないんだよね…。
風呂から出たばかりなのに、もう汗でびしゃびしゃ…。
orz

同じようなことが起こるのはもうごめんだから、仕方なく服を着てその日はさっさと寝ることにした。

くそう、寝苦しい…。

？　？　？

次の日の朝
平日なので学生である俺は学校に行かなくてはならない。

正直、昨日のことで精神はずたずたになってしまっているので行きたくはないが、家にいると親がうるさそうなので仕方なく学校へ自転車で行くことにした。
学校とはちょっと距離があり、自転車があるととても便利で助かる。

しかし、そんなことで気分はよくなるはずもなく、気分最悪で自転車をこいでいると、また昨日と同じようにあの穴が出現した。

それはもう唐突に突然、忽然と出現した。
自転車に乗っていたからか、昨日のように全裸ではない所為で気力が湧かないからか、
“二度あることは三度ある”とは言うが“一度あることは二度ある”とは故人が言わなかった所為からか、とにかく俺は自転車の前輪から穴に落ち、ついでに、地面と穴との境にヘットバットをくらわし気を失いながら死の恐怖を感じずに、穴の底へと落ちながらひとつだけ思った。

俺の人生これで終わり…。
俺お疲れ様でした。

プロローグ（後書き）

始めまして、ヘンゼルといいます。
初投稿です。

素人で文章は下手くそです
それでも読んでいただければ、幸いです。

第1話　勘違い

再度現状報告をさせてもらう。
目が覚めるとそこは、家の中だった。
家の中といっても、日本にある現代風のものとは違い、ドラ〇エの民家みたいな感じだ。
詳しくは知らないが、多分中世ヨーロッパのものに近い…と思う。
そういえば何か忘れている気がするが、よく思い出せない。
思い出す材料を探すために周りを見たら、赤くよく分からない文字で円陣っぽいものが描かれていて、その真ん中に俺が立っている状態だった。
あと変な道具（髑髏（どくろ）や十字架（ロザリオ））がたくさん置いてあった。
円陣の外側には淡い黄色のワンピースを着た女の子が泣いてるし…しかもサラサラロングの金髪が服との雰囲気があっていてて、とても綺麗だ。
顔は見えないけど、これは絶対に美人に違いない。
っと、いけないいけない、目の前で泣かれているのに何冷静に状況把握をしているんだ。
とりあえず、声をかけて慰めてあげよう。
「……あの、ちょっと聞いていい？」
「っひ！」
なぜだろう、おもいっきし怖がられているみたいだ。

顔はそこまで不細工でも、こわもてでもないのに……

ん？

てかよく考えたら、知らない女の子と部屋で二人っきり！

いやいやいやいや

大丈夫だ、何も間違いなんて起こってないはずだ。
だって、部屋の雰囲気は変だし、横には自転車…が………

自転…車？

あ～～そゆこと。

なんか全部思い出せた。
あれですか。
登校中に拉致られたのか俺。
あの穴で。
異世界への召喚魔術ってやつですか。
そうですか、そうですか、俺召喚されたんですか。

いぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃやっほぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！！！！！！！！！！！！！！
＼（（・（∀・（・∀・）・∀）・））／

異世界ってことは色々出来るじゃん！
例えば、魔法とかも使えるんだよね！
火の玉でドカーンとか、やりたい放題なんだね！

わくわくしてきたＺＥ！

っと、ちょっと小躍りしそうなぐらいテンションが、上がっているのを気付いたのか
また、女の子が怖そうにフルフルと震えてしまっていた。

やばい、このままじゃ変な目で見られる。

だけど、怖がりながらも、向こうから声をかけてきてくれた。

「あのっ、あなたは、魔王さまですか！？」

……はい？

ナニ言ッテンノ、コノ子？

別に言語が分からないわけではない、日本語だし…
何故俺が、魔王になんかなるんだ？

周りを確認してみても、ここがどこかの暗黒城みたいな感じはし

ないし、外では雀のような鳥の鳴き声が聞こえてくるし…。
とりあえず一度聞き返してみよう。

「ごめん……もう一回言ってくれる？」

「…はい、わかりました。…あなたは魔王さまですか？」

お辞儀してから丁寧に、さっきと同じことを言ってくれた。
しかも、さっきよりテンション三割り増しの、ちょい笑顔。

いやいやいやいや
ありえんありえん、
そこは普通、“あなたは勇者さまですか？”だろ？
何故に魔王なんだ。
そっちは勇者に倒される側だろう！？
俺まだ死にたくないって！！

「あの～魔王さま？」

ん？
女の子が話しかけてきたぞ。

…ちょっと待て。
ここで“何？”とか返事したらそこで絶対『私は魔王様ですよ』、
と言っているようなものだ。

どうする俺！？

選択肢？：素直に返事をする。
選択肢？：無視する。
選択肢？：逃げる。

この選択肢による結果

選択肢？による結果：魔王決定。精神的な死。
選択肢？による結果：この状況下では泣かれる。これは、精神的にきつい。そして結局、何も解決しない。
選択肢？による結果：不審者として、村？の人に捕まる。物理的に死ぬ。

とりあえず…

「俺は、魔王なんかじゃない！！」

『選択肢？：否定する』

さあ、どうなる俺！！

「あっ、はい…すみません……」

やばい、テンションガタ落ちだよ！

「えっぐっ」

え？

「うわぁぁぁぁぁん！！」

やばっ、結局は選択肢？と同じ結果かよ！

もう、こっちが泣きたいよ！！

畜生、大声出されたら、周りの人とかが来るだろうが。

兎に角、慰めなくては。

「大丈夫大丈夫、落ち着いて。」

まあ、半分は自分に言い聞かせているだけだが。

とりあえず、スマイルで近づく。

「何で、魔王さまなんか呼ぼうとしたのかな？」

「えっとね、魔王さまにね、お願いしたいことがね、あったの……
…ぐずっ」

おお、意外と素直に答えてくれたぞ。

「答えてくれて、ありがとう」

とりあえずなるべく優しい口調で言いながら、頭を撫でてやった。

少女はこちらを見て、軽く微笑んでくれた。
やべえ、めっちゃかわいい！！
そういえば、今やっと少女の顔をちゃんと見れたな。

まぁ、とりあえず次の質問だ。
ずっとあんな顔と声されたら、こちらの理性がぶっ飛ぶ。

「それで、どんなお願いをする気なの？」

女の子は意を決したように、言った。

「えっとね、…近所の子供を懲らしめてほしかったの！」

……は？

第1話　勘違い（後書き）

連続投稿です。
書くスピードはとてつもなく遅いです。
どんなに書き溜めようとしてもぜんぜんだめですね（＾＾ゞ
出来るだけ早くかけるように頑張ります。

第2話　いじめ

え～～～～～～～

そんなことに、いちいち魔王を呼ぶのかよ……。

しかも、もしそれで本当にそれを魔王がやっちゃったら、近所の子供どころか村全体が死ぬよ……。

分かっているのだろうか？

一応聞いておこう。

「あのさ、魔王なんか呼んじゃったら、近所の子供を懲らしめるどころか、村の人全員を殺されることになっちゃうよ？

分かってる？」

少女は困ったように答える。

「……え、そうなの？じゃあ、私もあなたに殺されちゃうんですか？」

「いや、だから俺は魔王なんかじゃないって…。ごくごく普通の一般庶民だって…。」

「じゃあ、どうしてあなたは召喚されたんですか？」

それは、俺が知りたい…、そして俺が聞きたい！

「そもそも俺はここに来てからまだあまり時間がたってなくて分からないことが多いんだから、何も知らないんだって。とりあえずいったん整理するためにこちらから質問させてもらう。いいね？」

女の子は承諾を示すであろう、首を立てに振った。

「まず名前は？」

「リイナ・ティアイノア」

良い響きのする名前だ。

「じゃあリイナ、次に魔王を召喚することは、どうやって知った？」

「本で読んだ」

なんとまぁ、そんなことを本に記していいのだろうか？

「その本には、魔王召喚についてどれぐらい詳しく書かれてた？」

「ええ～とっ、召喚に必要な道具と陣と呪文……あと効果、かな？」

結構、具体的だな。

「手順を間違えたりした所は？」

「陣を書くために必要な術者の血を、そこら辺にあったとにかく赤いものでなんとかした……ってところかな？」

「それだろ！！」

「えっ？」

「それだよ！それ！どう考えたってそれしかないだろう！

血とか、一番必要そうなアイテムじゃん！それを適当にそこら辺にあったものに換えたら、そりゃ魔王なんて、出てくるはずがないよ！」

やばい、思わずツッコンでしまった。

そもそも、そんな間違い魔術なんて知らなくても分かるぞ。

「……まあいい。他に間違った箇所はないか？」

「あとは、もうないと思う…」

「オーケー。で、子供を懲らしめてほしいんだよな？」

「はい…」

どうやら、どうしてそんな質問をしてくるのか分かってないようだ。

そういえば、耳が尖がっているって事は、エルフか何かだよな。

つまり、異種族へのいじめか…。

まあ、差別によるいじめなんてどこの世界でもあるものだな。肌色とかじゃなくて種族による差別なんて始めて聞いたことなのだけれど…。

「そいつ等の年齢と、あと階級は？」

「私と同い年ぐらいで、階級？は全員農家ですけど……あの～何でこんなこと聞くんですか？」

「そりゃあ勿論、そいつ等懲らしめるためだけど？…あっ、あと、

いじめてくる奴らの人数も教えてくれる？」

「はぁ…全員で１０人ぐらいです…。」

リイナは呆気にとられながらもちゃんと答えてくれた。

そういう性格なのだろうか？

というか、１０人ぐらいの中学生にいじめられてんのか。

とりあえず、質問を続けるか。

「次に、魔法は使えるか？」

「はい…」

よし！この世界に魔法があることが確定した！

「どれくらい？」

「だいたいの魔法はそこそこ使えます。」

「水を大量に出すことも？」

「出来ますけど…」

「それと一緒に鉄を少量でも良いから出せるか？」

「頑張れば…」

俯いている。どうやら軽く自信がないようだ。

「じゃあ最後に、網とシャベル広い場所、すべてある？」

「ありますけど……。いったいなんでこんな質問するんですか？何をするつもりなんですか？」

「だから、ガキを懲らしめるためだ」

？　？　？

そんなこんなで人気（ひとけ）のなさそうな広い場所。

簡単に言うと、この場所でガキ共をおとしめる。“懲らしめる”ではないのがみそだ。

準備には2日もかかったが、いや2日しかと言うべきで、実際ならもっとかかっただろうから嬉しい誤算だ。

もうひとつ嬉しい誤算があるが、今は言わないでおこう。

標的も来たようだしな…。

「ったくなんだよ。こんなところに呼び出して」「何の用なんだ？」

「面倒くさいなぁ…」等々。

そんなことを言いながらこちらに近づいて来ている男約五名。

長身で筋肉質の奴がひとり、さらに筋肉質で目が釣り上がっている奴が一人、のっぽでやや筋肉質な奴が一人、子供特有のくりっとした目をしている奴が二人。

髪と目は順に、薄い赤髪濁った赤眼、くすんだ金髪に空色の眼、茶髪にブラウンの眼、黄緑の髪に黄緑の眼、藍色の髪とブラウンの眼。

計五人がこちらに歩いてくる。

こちらの段取りのため一時止まってもらおう。

「そこからは、危ないぞ。」

「なんだよ、うるないな」

むっ、忠告してやったのに（まぁ、計画のためだけど）、判断材料にする気ゼロだな。

まあどうでもいいか。

そのまま、男、と言うには若いか。少年たちは真っ直ぐこちらに向かってくる。

よく見たら、少年ではなく青年というにふさわしい奴が2人もいるし、第一次性徴真っ只中の奴ばかりだと思っていたからびっくりだ。

だが実際、どれだけ体格がよかろうと年下のガキに手を出す思考と行動が一緒な馬鹿であれば関係ないので、冷静でいられる、パニックになったりすることは断言するがない！

まだしも、同年代または、年上相手に喧嘩を売り、さらに勝算があるこの状況に興奮を覚えているくらいだ。

そしてこれもどうでもいいか…。

一応武力で解決する前に、話し合いを持ちかけておこう。

…建前（たてまえ）だけ

「この子をいじめているらしいな」

そう言って隣のリイナを指す。

「そうだが、それがどうした」

さも当然のように一番の年長者が言う。

嗚呼、殴りたい！正直言って殴り飛ばして宇宙のもくずにしてやりたい！

あといじめていることに自覚があるんだな…、酷い事にかわりはないけど。

「じゃあこれからはいじめるな、いいな？」

途端に相手の顔が険しくなる。

「お前、誰様のつもりなんだ？
見ない顔だし、どこの家のもんだ」

「家はこの近くにはないが、今は一応リイナの家に住まわせてもらっている、何か問題でも？
それともあれですか、嫉妬？
自分が彼女がいないからって、はっ笑えるな」

最後に相手と目線を合わして、目と鼻で笑う。

いじめをしているやつって大抵プライドだけは一人前だからな。
これで相当プライドが傷ついただろう。

ぷちっ

やばい、堪忍袋の尾が切れたような音が聞こえたような気がした。

幻聴だと、嬉しいな☆

第3話　しつけ

完全にぶち切れている。
怒っている顔はまさに鬼の形相のだ。
いや鬼の形相と言うより、鬼の顔にしか見えないな。
真っ赤な顔もあわせてとても似ている。
そんな顔のまま、さっきまで話していた奴を先頭にこちらにずんずんと近づいてくる。

しばらく歩いたところで、相手の足元を踏み外し俺とリイナの視界から消えた。

ドスンという音がして5人全員が落とし穴に落ちた様だ。
ちなみにこの落とし穴は、俺が落ちたような無機質なものではなく、ちゃんとした古典的な落とし穴だ。
だいたい縦２０メートル横１０メートル深さ１０メートルといった巨大なものだ。
というかよく考えたら、子供向けのモンスターバトルアニメの〇ケット団はたった数時間でこれくらいの規模の穴をほぼ毎回掘ってるってのはすごいよな。
そういえば最近は、ポケ〇ン見てなかったな…。
こんなものに落とされたら、全員が肩車をして筋肉質の奴がそれをたどってジャンプしてもぎりぎり地上にはとどかないと思う。

もしとどいたとしても一対一なら勝てる見込みはあるし。

「どうなってかな…っと」

穴の中の様子を上から覗いてみると全員が全員尻餅をついて痛が

っている。
とりあえず相手が何かしらの行動を起こす前にこちらが先に行動を起こさないといけない。
小走りでそこから離れて、用意しておいた網をリイナをいじめている奴等全員にかかるように穴に落とす。

「リイナ、頼む」

次にリイナに向かって声をかけ、魔法を使うように指示し、集中している様子を確認してまたすぐに小走りで布をかぶせて隠しておいたもう一つの穴を出して、もう一度不良グループ（なんか一番しっくり来たので以後こう呼ぼう）の方に向かい今度はそちらに声をかける。

「は～い、注も～く！」
手をパンパンとたたき、不良グループの視線を集中させる。

「リイナ、やってくれ」
リイナのほうに向き、もう一度指示を出す。
リイナは頷き、魔法で作った水をもうひとつの穴の方に入た。

ザッパーン！！

小さな穴のほうに溢れんばかりの水が注がれ盛大な音がする。
突如、俺の左下の方からも水の音がする。
二つの落とし穴の壁と底を小さな穴で貫通させ水が通るよう工夫したから、人がいる方の穴にどんどん水が溜まっていき、それと同時にいじめっ子メンバー顔がみるみる恐怖の色に染まっていく。

「ここは人通りのあまりないところ、穴にどんどん水が入っていき、

日が暮れるまでには水は満タン。
そしてここには、そっちを助けることができる人（詳しくは人一名、エルフ一名だけど）が二名。
そしてこちらは、そっちにいじめられている奴が一人。
こちらにはこちらの要件があり、そっちにはそっちの要件がある。」

ふぅ、と一度息を吐きもう一度吸う。

「さてここで問題です。
早くしないとそっちは死ぬ。
そっちがこちらの要件を呑んでくれればこちらはそっちを助ける。
さあ、どうする？
こちらの要件を呑むか、それともここで死ぬか…」

ニィ、っと悲惨に笑う。

「そっちの言うことなんでも聞くから！！だから助けてくれ！！」

決断早っ！
さすがに早いよ！！
もうちょっとぐらい根羽ってよ！！

必死にそう叫ぶリーダー。
涙を眼にためている。
他のメンバーも同じ事を思っているのか、コクコクと頷いているだけ。
皆一様に心に傷を負ったようだ。

まぁ、いい気味だな。

可愛い子をいじめる奴は、こんな眼にあって当然！
そして、これよりひどい目にあってもらうぜ！！

「はいは～い、いいですよ…っと」

そう言いながら、また準備していた板を小さい穴の方に放り込む。
準備は万全だ。

ポチャンと音がし、水が止まる。
だが、大きい穴には水は全員の胴が浸かっている、網はかかったまま。
今はそれを何とかする気はないので無視しておく。

「まず一つ目。
…これ以上リイナをいじめるな」

不良グループに見える様に右手人差し指を突き出す。

「…わかった」

「ならこれでお前らを許してやる」

不良グループの顔が安堵によって緩む。

「次に二つ目」

右手中指を突き出す。
不良グループの顔を一人ずつ見ていく。
さっきよりちょっと顔が強張っている。

「…なんだよ。さっさと言えよ」

嫌な感じに勘付いたのか、くすんだ金髪、空色の眼の奴が言ってくる。

「じゃあ言うけど、…お前ら俺の下僕になれ」

「「「「「はぁ？！」」」」」

リイナを含めた全員がびっくりとしていた。

「だってお前さっき『何でも言うこと聞く』って言ってたし。
ここでこの条件を飲まなければならない立場だってのは、全員分かっているんだろう？」

「でもさっき『許す』って！
だからさっさと出してくれるんじゃなかったのかよ！」

戸惑いながら一人こちらに訪ねてくる。

「俺が言ったのは『許す』とは言ったが、『そこから出してやる』とは言ってないぞ」

「そんなの卑怯だ！！」

「卑怯とは言われても…、そっちだって散々ひどいことをリイナにしてきただろう？
そもそも、最初に突っかかって来たのはそっちなんだろ？
しかも、悪いのはそちら側だ。
なのにこちらが卑怯だと？

そんなことを言う資格はお前らにはないのに。

そもそもよく考えてみろよ。
リイナは非の打ちどころのない可愛いくていい子だ。
そんな子供が村中を歩いて『私はいじめられている』と言い回れば、
誰もがリイナを信用するだろう。
今までそういうことをしなかったのは、一重に恥ずかしかったから
だそうだ。

また、親には心配をかけたくなくて今までお前らがしてきたことは
言っていないそうだ。
村を一緒に周ってくれる友達もいないらしかった。
だから恥ずかしい。

だが、今は俺がいる。
俺がリイナと村を回り歩いてやれば、それも解決だ。

っと、ちょっと話がそれたな。

簡潔に言う。

村の人間に今までの行いをばらされたくなかったら俺の言うことを
聞け。
それが嫌なら、ここで死ね」

出来る限り事務的に平坦な口調で言い終える。
緊張とこんな感じで良いのかという不安が顔に出ていないか、ち
ょっと怖い。
どうやら、相手の顔を見る限り大丈夫そうだが。

「…分かった、お前の下僕になろう」

結局、リーダーは即決。

そういえば、１０人にいじめられてた、とリイナが言っていたが、残り５人は？

あと、こいつらの中で話したのは、２人だけだったな…。

第４話　仕返しの仕返しの…

まだ、残り何人か残っていたか…。

次の日の午後、そんなことを考えていた。

目の前には昨日と同じ輩が大勢連れていて、ひぃ…ふう…みい…よ、っと１４人もいる。

これが全員、リイナをいじめていた相手となると、クラスの約半分からいじめられていたってことになるのか…。

そもそもの発端は今朝のこと。

今朝、いつも通りリイナの家で朝食を頂いていると昨日の不良グループのリーダーが俺に会いに来て、

「俺たち以外の仲間を昨日の場所に集まるように言っておいた。昼過ぎくらいにこっちに来てくれ」と言ったことからだ。

それにしてもこいつは、身を翻すのが早いよな。

即行で俺の手下として寝返ってきて、元味方の情報を垂れ流しにして…いいのか？

こちらとしては楽が出来てよいのだが。

とか考えていたら、今の状況に落ちいっている訳だが。

仕方ないが相手をしてやらなければならない。

「とりあえず、“順番”を決めてくれないか？」

多人数を相手にするのは本当に面倒なので、まずは提案してみる。

「おっ、いいこと言うじゃねえか」

そう言って一人が笑うと、周りの奴らも俺を馬鹿にする様にどっと笑い、“誰から俺を殴るか”と言う順番を決め始めた。

なんとなしに耳を傾けて話を聞いてみる。

「じゃあ、俺が行く！」「いや、俺がやる！」「じゃあ、俺だ！」

「「「どうぞどうぞ」」」

！？

まさか、このノリがこの世界に存在するのか！

軽くコケそうになりながら、元の世界とこんなにも繋がっているなら意外と元の世界に戻るのって簡単なんじゃね？、とか考える必要あると思った。

数分後

どうやら決まったらしく、一人の青年が前に出てきた。

「まずは俺からだ、坊主」

そう言った彼は自慢げに手を広げる。

「実はな、俺は魔ほゴフッ！！？」

何か言おうとしたが、中断させた。

彼がしゃべり始める瞬間に、俺は中腰になり下半身に力を込めて彼に向かってジャンプし、鼻をへし折る様に膝で蹴った。
瞬間、相手はこちらの威力で気を失い、一回、二回、三回と後方に回転して止まった。
勿論、こんなことは普通の人間に出来るはずはない。なら何故俺は出来るのか。

理由は簡単、…俺に常時魔法がかかっているからだ。

魔法の内容は、人体限界の上限値の上昇、とでも言えばいいのだろうか。
人の筋肉はどんなに頑張っても、通常５％までしか使えない。だが、筋力増加・皮膚の意識的硬質化・神経伝達の上昇などによって、常人では成し得ない力で行動できるのだ。

そんな異常な行動を目の前で見せられた所為で不良たちは驚きによって目を見開いている。
だがそれも束の間、すぐに俺とは逆方向に走り出していた。

俺はそれを許さず、全員をのしていく。
一人、一人と倒れていき、結局ものの数分でそこには気を失って動けない奴で山ができていた。

「しっかし、話をしなきゃあいけないんだよな…。さてと、どうしたもんかねぇ…」

天を仰ぎながら爺くさい事を言ってみるが、虚しいことに聞く人は誰もいない。
とりあえず、適当に一人仰向けにして頬をたたく。

パシッ、パシッ

「…うっ、うっ！」

っち、目が覚めないな…。

「はぁ…暇だな…」

そう言ってもう一度天を仰いだが、言葉は空中に吸い込まれる様に消えていった。

?????????????????????????????
??????????????????

「うぅ……」

一人、どこからか呻き声が聞こえたのはそれから何十分も経ったときだった。

何とか注意深く声の主をその場で探す。

見た目がタフそうな俺と同い年ぐらいの少年がちょっとだが動いているのが分かる。

「おい、そこの今動いた奴」

とりあえず話しかけてみると…

ビクッ！ビクッ！ビクッ！

おい！今ほとんど全員が動揺したぞ！？

「…はぁ、もう演技しなくて良いよ。今ので全員起きているのが分かったし。それに逃げたり攻撃して来なければこちらからも危害は加えないから」

ざわ…、ざわ…

何やら起きて相談しているようだ。

じゃあどうして喧嘩することを避けようとしなかったのか、どうして全員を倒すようなことをしたのか、という疑問が出ているみたいだ。

「喧嘩を避けなかったのは出来なかったから。どう避けようとしてもそっちはやる気満々だったし。

全員と戦ったのは、こっちの方が強いと認めさせるため」

まあ、ほぼ完全に後付けな理由なんだけどね！

全員と戦った本当の理由は『その場のノリ』、だし…。

ちゃんとした理由に聞こえたのか、あっちは納得しているからいいんだけど。

「そんな訳で昨日会った奴には言ったけど、これ以上リイナをいじめるな。もしいじめる様な事があったら……命の保障はしない。あと俺の下僕になること。これも拒否権はから」

断言すると、不良たちはこれ以上抵抗しても意味がないと理解したのか案外静かだった。

「…ん。分かってもらえた様で何より。何か今のうちに聞きたいこ

とはある？」

「名前はなんて呼べばいい？」

「…は？」

「だから名前だよ、名前。なんて言う名前なのか教えろよ。どう呼べばいいか分かんねえだろうが」

そういえば未だにこの世界では名乗っていなかったな。

リイナや住ませてもらっているリイナの親には“異世界から来た”ということに対しての混乱を避けるため“記憶喪失”ということにして名乗っていないので、今ここでこいつらに名乗ると矛盾が発生してしまう。

けど、ここで名乗っておかないと変だし…。

偽名で良いかな？

でもこの世界の名前なんでどういう風に作っているのか知らないし…。

「お～い、聞いてるか～？」

不審がってこちらに話しかけてくるがどうしたものか…。

もう適当にあだ名で良いよね！

「とりあえず俺のことは、ボスって呼んどいて。今はちょっと事情があって言えないから。それにボスって言っても、別に敬えとは言わないし、あと命令することなんてほとんどないと思うし。今まで通り生活していても大丈夫だから」

どうやら、思っていたより断然楽だったらしく皆喜んでいる。

では締めといきますか。

「じゃあ、今後質問がある場合はリイナ宅に失礼にならない時間に来るように！そういうことで今日は解散！」

手をたたきそう言うと各々すぐに帰っていった。

「さてと、そろそろいい時間だし、今日の夕ご飯は何かな～♪」

俺も夕食のためにちょっとだけ急ぎ足で帰ることにした。

第４話　仕返しの仕返しの…（後書き）

遅くなってすみません。
色々忙しくてあまり書けませんが、時間があるときに頑張って書いていきたいと思います。

そういえば、主人公の名前まだ出してなかった……。

第5話　証明

その日のリイナ宅での夕食はパンにスープ、旬の野菜を使ったサラダと結構普通のものだった。

「ねえ、今日は昼からどこへ行っていたの？」

リイナがこちらに視線を向けて聞いてくる。
自分を呼んでいるのかどうか分からなくて反応に少し困ってしまう。

「ん？あぁ、えっと…」

さて、どう言ったものか。
ここには勿論リイナの家族、つまりはリイナの親がいる訳だ。
いじめを受けていたことはリイナは親に知られたくないらしいが、本人はその話だとは気づいていないようだ。

「昨日会った奴らと色々話してた」

うん、これなら嘘は言っていし気づけるだろう、……と思ったがどうやら気づいていないらしく質問を続けてくる。

「どんなこと話してたの？」

「色々だよ」

「色々って？」

「あー、その…」

「あまり言いたくないんじゃないの？」

リイナに質問攻めにされて困っているとリイナのお母さん、ユウナさんが助けてくれた。

ちなみにこの人はエルフで、リイナと同じく金髪金眼の美女だ。

「そんな感じみたいだし、言いたくなってから聞かせてもらいなさい」

「はい……」

納得はしてないようだが、とりあえず引っ込むリイナ。

とりあえず、ユウナさんに軽くお礼を言っておく。

「あの、ありがとうございます」

「いいの、いいの。…だけど私にはちゃんと夕食のあとに話しなさい。いいわね？」

「……（目が怖い！！）」

「どうしたの？い・い・わ・ね？」

「……はい（逆らえない！！）」

そんなこんなで夕食を終えると、リイナは部屋に戻り俺はリイナの両親と会話することになった。

というか今分かったことだが、この人達とはリイナを挿んでいつ

も話していたので正面に向き合って話したことは一度もない。
よってこれが初めてという事になるので……

「……（話しにくい）」

目を逸らす以外、俺は方法を知らなかった。
そんなことをしていると、まず話の口火を切ったのはユウナさんだった。

「？　大丈夫よ？何も怖いことはしないから。多少怖がらせてみたいと思ったのは事実だけど」

「あんた、生粋のドSだろ……」

「あら、何か言ったかしら？」

「いいえ！？何でもないですよ！」

やばいな。つい口から本音がポロッとこぼれてしまった。
二人共聞こえていたのかユウナさんは雰囲気が怖いし、リイナの父のリウスさんは顔が怖くなってるし。
リウスさんはリイナの父親で銀髪赤眼、普通の人間である。

「じゃあ、早速話すけどあの子のことで隠し事しようとしても無駄よ。あの子隠し事が下手だから何でもすぐにばれてしまうわ。だから、あの子がいじめられていたのも知っているし、自分でなんとかしたかったのも知ってる。それで最近それが解決したことも知ってる」

俺は完全に当たっていて唖然としていた。

今まで隠してきたことはなんだったんだ、と思うくらいに。
それほどまでにリイナは隠し事が出来ないのか、それともユウナさんの推理力がすごいのか。
そんなことを考えているとユウナさんは続けて言う。

「……けどあなたのことは知らない。唯一知っているのはあなたがリイナによって召喚されたこと。記憶喪失って言っているけど、どうせ嘘なんでしょ？名前も覚えていて、どこに住んでいたのかも覚えておる。けど言いたくない。違う？」

ちょっと険しくなった目つきでこちらを睨むため身が竦みそうになるが、何とか口を開く。

「ユウナさんの言っていることは正しいです。俺は記憶喪失ではないですし、自分の名前も住んでいた場所もちゃんと覚えてます」

「そう、ならなぜ嘘をついていたのかしら」

「一番は保身ですけど、やっぱり周りを混乱させないためです」

「まず俺の名前ですが、桐瀬（キリセ）紺（コン）と言います。……どうですか、聞いた感じ変でしょう？こんな名前を何も分からず聞かされたら混乱される。だからちょっとの間準備期間として言わないでおいたんです」

一拍おくためにユウナさんとリウスさんの顔を確認する。
そこには、予想通り驚愕によって染められた顔が二つ。

「次に住んでいた場所ですが聞きますか？聞いても絶対に分からない場所ですけど」

「では、地名は言わなくて良いが、どの辺りか教えてもらえるとありがたい」

そう聞いてきたのはリウスさん。

今まで空気のような存在感だったので多少反応するのが遅れてしまう。

「……えっと、世界全体で言うと東方面ですね」

「ではこの近くではないか？」

「あなた、よく考えてみなさい、キリセ　コンっていう名前と同じ様な名前聞いたことあります？」

「ん、……そういえばないな」

「もうっ、よく考えて言ってください」

ユウナさんはリウスさんの方を向いて軽く怒っている顔を見せたあと、また俺の方に向き直り尋ねてくる。

「で、結局あなたはどこから来たの？」

あ～やっぱり明言しなくちゃいけないのか。

漫画とか小説の主人公はよくこんなことをサラッと言えるな。

「……異世界から来ました」

……やっぱり恥ずかしいな。

ほら、さっきからこの人たちが俺を見る目がイタい子を見る目だし。

「……とりあえずそんな冗談は置いといて、あなたはどこから来たの？」

「冗談じゃないんですって！！本当に異世界から来たんです！！」

「そんな事言うんだったら、証拠を見せなさいよ、証拠を」

「分かりましたよ！ちょっと待っててください！！」

どうやら完全に疑われている様なので、とりあえず来たときに一緒に持って来た物の中から探す。

「何がいいかな……」

学校にはエナメルバックで登校している。

エナメルバックの中には教科書、ノート、筆箱、財布、電子辞書、制服（今俺はリウスさんの服を貸してもらっている）、プリント等々。

制服のポケットの中には携帯電話とウォークマンが入ってる。

電子機器三つでいいか？

いやまた何かしら文句を付けられると面倒だからエナメルバックごと持って行けばいいか。

「お待たせしました。これが俺が異世界から来た証拠です」

だいぶテンションが落ち着いてきた声でドンッとエナメルバック

をテーブルの上に置く。

「これは？」

「これは俺がこの世界に来たときに持っていたものです。この中の物を見て頂ければ、俺が異世界から来たというのが分かると思います。どうぞ見てください」

「あなた、これどうやって開けるか分かる？」

「いや、分からんな……」

何やらヒソヒソと話している。

どうやらジッパーの開け方が分からないみたいだ。

「ちょっと貸してください」

ジジジ……

ジッパーを開けてバックの中身をテーブルに並べていく。

「この本は？」

「これは教科書と言って……」

まずはそれぞれの名前、どのような物か、どのように使うかなどの説明をした後に、この進歩した文明とこの世界の文明の違いを証明。

ようやく全て話終える頃には三時間はかかっており、そのせいで精神的にすごく疲れてしまっていた。

「これで終わりですが何か質問は？」

一通りのことを話して二人に確認を取ると二人とも「もう大丈夫」だと言ってくれたので席を立ち、俺にあてがわれている部屋に向かう。

「けど、明日は私達の話を聞いてもらうわ」

「分かりました」

背中から声をかけられ軽く振り向き返事をしておく。

今日は色々あって結構疲れたな……。

第5話　証明（後書き）

すいません……長らくです。

次回は説明回になります。

相変わらずの遅さですが、これからも応援お願いします。

第6話　依頼

夕食後にユウナさん達から話があると言っていたが、それまでは暇なのでリイナから家で魔術についてマンツーマンで習っていた。

曰く、魔術は二種類に分けられていて、俺が良く知っている火や水を出す魔術を“魔法”と言い、魔物を召喚する魔術を“召喚魔法”と言うこと。

召喚魔法は使用する魔力が少ないため、一般的に人気で多く使用されていること。

また研究されて技術が進歩していること。

詳しいことを言うと、召喚魔法はさらに二つに分類することができ、転移召喚と精製召喚に分けることが出来る。

転移召喚の方が精製召喚よりも、あまり大差はないが転移召喚の方が魔力を多く消耗すること。

転移召喚は召喚したい魔物と自分との間に扉を開き召喚する。

精製召喚は召喚したい魔物の媒体となる物を使い、一から魔物を作り出して召喚する。

一方魔法は応用力こそあるが、魔力を多く消耗してしまうため、あまり使われず人気が劣っていること。

こちらも詳しいことを言うと、空気中には魔力が満ち満ちており それを魔法に変換させて、または自分の体内にある魔力を魔法に変換させて発動する。

このとき呪文を唱えたり陣を描くことで、魔法をよりスムーズに発動させることが出来る。

買い物で例えるなら、安くて質の悪い物を買うか、高価で質の良い物を買うか、と言う話になる。

これは俺の考えだが、ある程度時代が過ぎれば応用力がある魔法の方が多く使用されるだろう。

国同士の争いとなると、召喚魔法で召喚された魔物は次々と殺され減っていく訳だから、魔力が尽きない限り無限に使える魔法の方が最終的に重宝されると思うからだ。

次に魔力の事だが、基本的に誰にでもあるが、その量は個人差があるらしい。

自分自身の魔力を回復させるためには空気を吸って回復させるか、睡眠をとるなどというスタミナを回復させるか栄養を取るなど。

また、自然と回復することが出来る様だが、あまり早くはないらしい。

また、召喚魔法と魔法の二つに共通することで、出来上がる魔法をより精密に想像することでより強力な魔法を発動することが出来るらしい。

「……とまあ、魔術については大体はこんな感じだね」

「なるほど……」

何時間も授業を受けていたので、最後のあたりはあまり頭に入らなかったが、今のところ大丈夫そうだ。

蛇足だが、俺が常時魔法を発動しているのに初めに気付いたのは、実はリイナだったりする。

しかし、なぜこの様な魔法を俺が常時発動させているかは、今の

ところ不明だ。

？　？　？

昼食を取った後、俺は不良達の一人に村の案内をしてもらっていた。

「……で、あっちが村長家、あっちに見えるのが領主様の家」

へぇ、やっぱ村長と領主は別々にいるのか。

「じゃあ、村長と領主様の悪い噂って聞いたことある？」

「いや、特には聞かない」

「生活は苦しくない？」

「全然、むしろ楽だな。てか何でこんなことを聞くんだ？」

「ん～？ただの興味本位だ、気にするな」

内心焦りながら、適当に誤魔化す。

領主の館が地味に豪奢なのは気のせいか？

ちなみに、この案内は散歩という名目が俺にとって非常に高い。
リイナの授業で頭パンク寸前だったからな。
リイナも誘ってみたが、まだ本が読みたいらしく何やら難しそうな本を手に取って、行きたくないオーラを出していたので俺一人で外出して案内してもらっているという訳だ。
もしかしたら、不良達に会うのが怖いのかもしれない。

？　？　？

で、その日の夜、予定通りユウナさん達から話があるから夕食後もここにいろ、と言われた。
「単刀直入に言うわ……リイナの護衛をしなさい」
「今でも半分している様なもんですけど？」
異世界に来て始めての知り合いだし、いじめられてたしで、結構一緒にいたからな。
「いいえ、そう言う意味じゃないの。これからリイナにはかなりの間、都市に滞在してもらうことになって……。だから一緒に行け

る信頼出来そうなあなたに頼んでいるの、お願い……」

「……もし断わったら？」

「そのときは、村長か領主に不審人物として突き出すわ」

完全に脅しじゃん……。

「ユウナさん達は都市に一緒に行かないんですか？」

「私達は私達でここから引っ越す準備をしなくちゃいけないの」

「えっ！何でですか？……もしかしてリイナを捨てて逃げるって言うんじゃ…」

俺の予想を聞いてビックリしたユウナさんは苦笑いをしながらきっぱり否定する。

「ちがう、ちがう。引っ越しに少し手間がかかるだけで別にそんなことはないから」

それに、とユウナさんは続けて言う。

「私達も都市に引っ越すから。まぁ、当分は一緒に暮らせないけど」

「どういうことですか？」

さっきから、どうも単刀直入すぎてどういうことか分からない。

「リイナには都市の方にある魔術学校に通ってもらうことになった

の。でも、ほら……あの子あの性格だから誰かに見守ってほしいのよ。それでちょうど良くあなたが現れてくれた。……あぁ、あと断ることはできないわよ。もし断るようなら領主につき出すから」

「いいですよ。引き受けます。ご飯食べさせてもらってるし、家にも泊めてもらっているし、何より俺のことちゃんと知っているのユウナさん達しかいないし。……というかなんで急にこんなことになったんですか？」

「…長くなるわよ」

言葉と一緒に放った微笑みはこのことは誰にも言うな、と行っているみたいだった。

第6話　依頼（後書き）

次回も説明会になりそうです。

あと、感想いただけると嬉しいです。

第7話　事情説明会（前書き）

今回は会話主体の説明会です。

第7話　事情説明会

「さてと、いったいどこから話すべきかしら？」

「まずは、僕達の出会いからじゃないか？いや、とりあえず出身から言った方がいいか」

「そうね」

そう言って、ユウナさんは左側の髪を掬い上げ耳を見せると、そこには予想通り尖った耳がある。

「見ての通り私はエルフ。……それで、この人は貴族」

指を指す向こうにはリウスさんしかいない。

いや～流石にないでしょ。

「冗談ですよね？」

「フフッ……ほ・ん・と・う」

「そんな馬鹿な～、言っちゃあ悪いけど全然、全く、これっぽちもそんな感じしませんもん」

ここまでで、俺・ユウナさんは終始笑顔、リウスさんはというとどんどん凹んで行ってる。

「本当だから受け止めなさい。で、当時はこの人貴族、私平民でしかも異種族ってことで結婚を反対されてたの。でもどうしても一緒

にいたかったから都市から離れてここまで逃げてきたのよ。それで結婚、リイナ出産、今の生活って訳」

波乱万丈な人生送って来たんだな、この人達。

俺も異世界トリップつうことになってるけど、こっちはこっちで生々しい。

「でも何で今更都市になんて行く必要があるんですか？ましてや、そこに住むなんて『どうぞ自分たちを見つけてください』って言っているようなものじゃないですか」

するとリウスさんは突然立ち上がり家の奥へと行ってしまった。

さっきはいじめ過ぎたから、拗ねちゃったのかな、やり過ぎたかな、と考えていたら、どうやらそれは杞憂だったらしく、何かを持ってリウスさんが戻ってきて、それを机の上に置いた。

「これは？」

「これは父様からの手紙だ。もうここのことはとっくの昔にばれている」

「じゃあ何でここに住んでいられるんですか？いや、住んでいられたんですか？」

「簡単な話、リイナがいたからよ」

「リイナが？」

「そう。妾でも正妻でも、ましてや嫁候補にも挙がっていないような私がこの人と一緒にいられるのはあの子が生まれて来てくれたか

ら、あの子というこの人との形ある繋がりがあるから、相手は手を出すことが出来なかったの」

それに神様の前で愛し合っているって言っちゃったしね、と幸せそうな笑顔で言う。

「でも、それはユウナさん達が都市に行く理由にも、リイナが魔術学校に通う理由にもなっていません。なんでこんな事になったんですか？」

「さっき手紙が義父様からきたって言ったでしょ？そこから手紙のやりとりをするようになって、私とリイナも義父様の家に迎え入れてもらえるようにお願いしたの」

ユウナさんはさっきまでの幸せそうな笑顔を消して、今度は腹黒そうな微笑みになっている。

「一体何したんですか……」

「あら、別に大したことはしてないわよ？リイナのどこが可愛いいとか、どれくらい成長したかとか、どんなことができるようになったかとか…そんなことを何度も何度も書いてたらリイナも一緒に迎え入れるって言ってきて……でもそれって言葉を返したら『お前だけは来るな』と言っている様なものなのよね。だから私は『リイナは私と離れたくないようです。もしそれでもと言うのなら私はたとえどんな罪に問われようとも貴方の家を没落させてみせます』って脅してやったら、私も迎え入れてくれるようになったの。でもそれに条件が出されて、リイナに『魔術学校に通わせ淑女としての嗜みを覚えること』と私に『こちらに来て一年はあまり公の場に出ないこと』」

「そんな！それって酷くないですか？！」

「いいえ、これは私が貴族の生活に慣れるまでは“外に出ない方が安全”と言ってくれてるの。貴族と会話した経験がほとんど無い私を気遣ってくれているし、とってもいい条件だからこの条件を呑むことにしたのよ」

ユウナさんは一度、喋り過ぎて渇いた喉を潤すために水を飲んだ。

「とまあ、そういう訳でリイナと年が近いあなたに学校に付いていてほしいの。学校じゃあ親が付いていくことも出来ないし」

「五歳ぐらい離れてるのに近いって……」

「あら、あなた二十過ぎてたの？」

「いえ、まだ十七ですが？」

「なら、やっぱり近いじゃない」

「？」

「あなた、リイナの年がいくつだと思ってるの？」

「十歳ぐらいじゃないんですか？」

「やっぱり間違ってるわね。あの子今年で十六よ」

「それはないでしょう。リウスさんに言ったことと同じようなこと

言いますけど、それこそそんなふうに見えませんもん」

「さっきも言ったけど本当よ。でもまあそうよね。あの子、体も心も子供だものね。でも魔力は結構あるから、もしかしたらそっちに成長力奪われたのかもね」

本当にそうなら、“強い＝ちっちゃい”の構図ができてしまう。そうなると、がらの悪い強い兄ちゃん達は全員ちびっ子……面白そう。

「話を戻すけど、リイナと年が近いあなたに学校について行って欲しいの。もし駄目って言うのなら……」

「大丈夫です、大丈夫ですって。こっちは命懸けられてるんですから断られませんよ。でも、俺も学校に行くとして、俺の立場はどうなるんですか」

「ん～まあ、冒険者ってことでいいんじゃない？」

“いいんじゃない”ってけっこうなげやりだな。

「で、いつ出発なんですか？」

「明日よ」

結構急なんですね……。

第7話　事情説明会（後書き）

タイトルを少し変更しました。

感想をお待ちしております。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9644u/

勘違いで魔王さん

2011年11月15日20時04分発行